



# 信念と夢

夢を持って！

福島 鏡

俺は十七歳の頃から外国へ行きたいと思っていた。計画では世界無銭旅行だったが、情勢と経験で現在アメリカに住んでいる。二十一歳になったばかりで初渡米。その時は一年弱で帰国し、東京で先輩の牛丼屋を手伝いながら再渡米のために英語の上達を目指し、F E N（米軍極東放送）を毎日のように聞いていた。

ある日。俺の心をぐらぐら揺さぶるような曲がF E Nから流れてきた。R・Sが歌う“セイリング”である。ゆっくり歌う英語の歌詞の意味がわかる。これからこんな歌詞みたいな大海原を目指して人生の旅に出て行く自分を想像した。R・Sのハスキーで力強い声、心の強さを秘めた航海者に旅人の自分を重ねる。すっかり俺はこの歌に魅了されていた。

毎日同じ時間がくると“セイリング”がF E Nから流れてくる。いつしか、俺はこの歌手に会ってみたいと思うようになった。それはほんとうに馬鹿な戯言か寝言だった。俺は何十年も生きているが、只の一回もライブ・コンサートなるものに行ったことがないし、それが実現可能な材料は百パーセントなかった、いやそれは百パーセント以上になかった。叶わぬ夢と知りながら、それでもこの曲が好きで好きで時間がくると、毎日この曲を聴いていた。そして、この歌手に会いたい、R・Sに会いたい、心のなかでつぶやいた。

やがて、再渡米の準備が整うと又アメリカへ向った。最初の目標は永住権を取得する、だった。そのために俺は、カリフォルニアからテキサスの間を彷徨った。日本にいたときには、アルバイトただけでもマネージャーになったり、会社の重役候補の申し出を受けるほど仕事と人柄を認めてもらえたが、アメリカでは永住権を餌に最低賃金以下の待遇とよそ者扱いを受けた。どこの職場にも親分か牢名主みたいな中心人物なる奴がいて、気の利いた事やまともな言葉ややり方を口にするともう村八分になった。

その村八分的八方塞がりから二年振りくらいにロスへ戻ってくると、アメリカでは圧倒的知名度のあるベバリー・ヒルズの鉄板焼レストランに就職した。ここで働く従業員は今まで仕事したどのレストランよりも開放的で個性があった。仕事で中心になる人はいても従業員を差別するためにグループを作る中心人物がいなかった。

給料は大したことがなかったが、仕事は楽しかった。ハリウッドやベバリー・ヒルズの有名人、日本の有名人も観光客や外国人客にまぎれてテーブルに座っていた。だからこの店で働いている従業員はもうどんな有名人がきても驚かなかった。

「今日は、マイケルの兄貴が来てるね。昔はマイケルもよく来てたけどね・・・」  
静かなものだった。

日本にいた頃から、殆んどテレビを見なかった。アメリカに来てからも仕事を終えてアパートに帰り、寝る前に少しスウッチを入れるくらいで、あまりテレビを見なかったが、アメリカン・フット・ボールだけは別だった。

仕事にも慣れ、やっと客にも喜んでもらえるようになった頃である。ウエートレスがチーフ・シェフに向って

「このテーブル、だれが焼きに行くの。ちょっとした有名人だけど」

この時、キッチンには俺とチーフしかいなかった。新米の俺で客に粗相があってはまずいと、気を利かし

してくれたのだろう。

「だれでもいいよ。トニー、お前行け」

チーフは気にする風でもなかった。チーフがああ言っているから俺でも大丈夫なのだろう、と思った。

ちょっと気の軽くなった俺は、注文の品をピцца・パンに盛りオーダー表に書かれたテーブルへと出ていった。六人掛けのテーブルに男四人で座っている客を見ると、

「ハロー。ハウ・アー・ユー」

挨拶してすぐに綺麗なタオルで鉄板を拭いた。四人ともステーキ・アンド・ロブスターだが、一応確認のために一人ひとりの注文を聞いていく。そして正面左に座る男性の顔を見たときにぎくっとした。その顔は、もしかして、まさか、の閃きが走った時には、もう九十パーセント間違いない確信がびびっと体を揺すった。それからすぐ百パーセントの確信が脳裏をかすめると、体が震えてきた。

彼は、あのR・Sだ。と意識すればするほど動悸が激しくなった。信じられない現実が目の前にあった。料理用のフォークを握る手が震える。スパチラーを握む手が震えてくる。とにかくこの注文を全部料理しなければ。脳天に血が昇り、顔は真っ赤になり、全身に吹き出るような玉の汗を掻きながら料理し始めた。

やっとスムーズに切れるようになったアプタイザーの海老切りが思うように切れない。それを見たR・Sが

「ファースター、ファースター……」

の声を出す。この店のチーフは“マシガン・フレッド”と呼ばれ、常連やハリウッド、ベバリー・ヒルズの有名人の間でも有名で、中東産油国のある皇太子もリムジン二台にシークレット・サービスを従え、マシガン・フレッドを指名で食事に来ていた。マシガン・フレッドのチーフが左手のフォークで海老を押さえ、素早く振り上げた右手に握るペティ・ナイフで、目にも留まらぬ速さでダ、ダ、ダッ……とマシガンのごとくアプタイザーの海老を切っていく。多分R・Sもマシガン・フレッドを想像してせきたてたのかもしれないが、今の俺は焦るばかりであった。料理には何の問題もなかったが、包丁さばきもちょっとしたパフォーマンスも全然ぎこちなくて冴えなかった。

必死の二十分。極度の興奮二十分が終わったと思ったら、R・Sが

「ワン・モア・ロブスター・プリーズ」

直接俺に依頼した。

「エス・サー」

これでどうにか落ち着いてきた。しかし、興奮冷めやらぬ、とはこのことだろう。この夜は眠りにつくまで心が震えていた。実現するはずのない夢の夢が実現したのである。

こんな夢は目標に掲げられるような夢ではない。計画して叶うような夢でもない。しかし、否定したことは一度もない。俺は言いたい。いいことならば夢を見よ、と。



あまり世の中に名前を知られた人のことを引き合いに出すと、またこんな話かと、相手にもされないかもしれないし、不快な思いをされる人もあるかも知れない。特に小さな世界に生きている人にとっては、自分には関係ないことだし、全然おもしろくもない話であろう。しかし、まさか、ひょっとしてと、夢を見る人が少しでも本気になって自分の人生に向き合ったり、生きる力を見出してくれる切っ掛けになれば、それはそれでいい話になると、信じている。

俺が永住権を夢見てダラスを彷徨っていた頃、ある日本のレストランで、食事に来たダラス・カウボーイズの選手を見た。筋骨隆々の大男で関取みたいに大きいのが、腹はきりりと引き締まっていた。俺も少年自衛官の江田島で鍛えた逆三角形のきりりと引き締まった体をしていたから、彼らの鍛え上げられたその体に敬意を表するほどに見とれてしまった。それからこの極限にまで鍛えられたアメリカン・フット・ボールの選手が、力とスピード、技の粋を集中させて繰り広げる試合をテレビで観戦するのが好きになった。

司令塔のクォーター・バック。クォーター・バックからフット・ボールを受け取ったら相手チームの隙間を突き破って走るランニング・バック。相手チームの防御ラインを突き抜けてクォーター・バックから飛んでくるフット・ボールをジャンプしたり相手チームから邪魔されても掴み取るワイド・レシーバー。ルールが判るようになると、その極限のプレーに小躍りしてしまうほど嬉しくなる。それがアメリカのプロフェッショナル・フット・ボールである。最頂のチームができると、試合に勝とうが負けようが見たくなる。

少しルールがわかるようになると、アメ・フットの面白さは他のスポーツとは比べ物にならないほどの醍醐味がある。あれは一九八三年一月三日。マンデー・ナイト・フット・ボールだった。ミネソタ・バイキングとダラス・カウボーイズ。ダラスに攻撃権が移るが、ボールの位置はダラス陣地エンド・ゾーンの一ヤード手前九十九（正確には九十九、七ヤードだったと言う人もいる）ヤード。ミネソタのディフェンスがダラスの持つボールをそのまま一ヤード押し込んでエンド・ゾーン（タッチ・ダウン・ゾーン）に持ち込めば、ミネソタのタッチ・ダウンとなり、ボールを持っているダラスのクォーター・バックをそのままエンド・ゾーンで捕まえるだけでも二点のセイフティーになる。状況は興奮の頂点にあった。この試合はダラスのアウェイである。

ボールを手にしたダラスとそのボールを奪還しようとする両者が向き合う。ボールを取ったダラスのクォーター・バックが少し後ろに下がリエンド・ゾーンの後ろ側でボールをランニング・バックのT・Dへ渡す。ダラスのオフENSシブ・ラインが力の限りで押し開けたミネソタのディフェンシブ・ラインの隙間を疾風のごとく、T・Dが走る。ディフェンスの手がT・Dの足や体に触るが、彼はそれを振り切りディフェンス・ラインを突破する。身長百八十センチほどで出場選手の中では小柄なT・Dが全速でダラスのエンド・ゾーンを目指して走る。ディフェンスの足の速いセイフティーが追いかけてくるが、レシーバーのD・Pが阻止してT・Dはタッチ・ダウンした。

これでT・Dのファンになり、ダラスの人が、テキサスの人が、あるいはカリフォルニアやアリゾナ、ニュー・メキシコ州でも人気のあるアメリカズ・チームと言われるダラス・カウボーイ

ズのファンになってしまった。いつしか有名なアメリカン・フット・ボールの選手を見てみたい、と思うようになった。

俺はシェフとしてアメリカの西部を転々としているが、いつも仕事と商売と自分の夢に向って戦っていた。遊びじゃない、むしろビジネスは利益を出すための戦争だ、と思っていた。だから、俺に商売を相談したり任せた人に損をした人はいない。

一九九八年。俺はダラス/フォート・ワース国際空港近くの店を任されていた。レストラン経営の経験がない日本人駐在員オーナーの意向を尊重して、ランチは良くてもディナーは不気味なほどに住人の少ないロケーションの商売は尋常ではなかった。ただ、周辺にはフォーシーズン・ホテルとマリオット・ホテルがあった。

毎日まいにち半年間休みなしで働いた。最初から儲けるなら他に場所があるのに、私も女房もこの場所が気に入っているのでこの場所をお願いします、レストラン・ビジネスを知らないオーナーのたつての願いだった。周りに人家のない店が入居する場所は、一階の道路に面したところが商業スペースになり裏が駐車場、二階から五階までがこの辺りでは唯一の高級アパートになっていた。当時このアパートには“燃えよドラゴン”でブルース・リーの相手役のアメリカン空手俳優のC・N、プロ・レスラーのE・B・E、カウボーイズ・パウンターのM・Sが住んでいて、彼らは皆この店の常連だった。俺が見たかったのはクォーター・バック、ランニング・バック、ワイド・レシーバーの花形である。

ある時、フォーシーズン・ホテルのコンサージ（フランス語でコンセルジュ）がホテル従業員と食事にきて、俺のパフォーマンスと料理に満足して帰っていったからはアメリカや世界の有名人もくるようになった。

ある日、入り口近くの鉄板焼テーブル一番に夫婦で座っている頭の禿げた男がいた。大きな体に頭の天辺は禿げているが、その下に生えている白っぽい金髪。まさか、もしかして、と少し近づいて横から顔を確認めるとぶるると体が震えるのを覚えた。間違いなかった、彼はテレビで何度も見たことのあるピッツバーグ・スタイラーズの名クォーター・バック、T・Bだった。スーパー・ボールで四回優勝している。俺はどうしてもこの店を繁盛させるために自分のシェフとしての名誉にかけて、このテーブルを焼くことにした。

以前ベバリー・ヒルズの鉄板焼レストランでブリティッシュ・ロック歌手のR・Sを焼いた時ほどのあがりと震えはなかった。あれから七、八年。俺の料理の腕前もパフォーマンスも格段に上達していたが、どうしてもマシンガン・フレッドには及ばなかった。俺の料理とパフォーマンスを見たT・Bと奥さんはしっかりと俺の方を見ていた。そしてT・Bが話しかけてきた。

「あなたは日本のどこから来ているのだ」

「九州の鹿児島というところの出身です。かなり南です」

「多分、私はそこに行ったことがある。私はそこでゴルフをしたことがある」

日本でゴルフをしたことのない俺には知っているゴルフ・コースなんて全然ないが、テレビで宣伝していた指宿カントリー・クラブがあることだけは知っていた。まさかのもしかで、

「指宿カントリー・クラブではないですか」

と聞いてみると、うむと考えた後で

「そうだ。確かそんな名前だった」

T・Bが頷き、夫婦共々料理にご満悦で帰っていった。

それからは月に二、三回俺が仕事しているかいないかを電話で確かめてから、指名で食事に来るよ

うになった。娘が生まれると、生まれた次の日に、

「生まれたばかりの娘だから、よろしくな」

紹介するし、お父さんとお母さんがルイジアナ州のボイジャー・シティから来ると、も又紹介してくれた。サインを頼むと、もちろん気持ち良くサインをしてくれた。

この店のオーナーの仕事の関係で、店に来たダラス・カウボーイズ名クォーター・バックのR・Sと一緒に撮った写真もある。このR・SとT・Bは往年のライバルであり、アメリカン・フットボールにおいては日本野球界のO/Nみたいな存在である。

そして一九八九年。不振にあえぐカウボーイズはこの年のドラフトでUCLAのクォーター・バックT・Aを獲得するが、多くのダラス・カウボーイズのベテラン選手は年を取り、十六試合あるシーズンを一勝十五敗という考えられない最下位の成績で終わった。チーム創設以来ヘッド・コーチを務めてきたアメリカン・フットボール界の名物コーチT・Lも新オーナーのJ・Jによって解任された。

一九九〇年。この頃のカウボーイズの人気は地に落ちていた。ホーム・ゲームでも六万人ちょっと入るスタジアムに二万から三万人ほどの観衆しか入らなかった。店で食事するカウボーイズの選手を見向きもしないほどに地元のファンの目も冷めていた。それは無視に近かった。

そしてある日。鉄板を焼きにいったテーブルにクォーター・バックのT・Aとライン・バッカークのJ・Dが座っているではないか。不思議だった。ダラス・カウボーイズのクォーター・バックが店の中にいるのに、客のだれ一人も騒いでいなかった。二人は静かに話をしていたので、俺も何も話さずに料理を終えた。テーブルを去るとき、

「いかがですか」

と、どのお客さんにも聞くようにたずねた。

「有り難う、シェフ。全部美味しいし、素晴らしいよ」

笑顔で応えてくれた。

一九九一年のシーズンはやっとプレイ・オフに手が届くが、ワイルド・カードで敗退してしまう。

そして一九九二年がやってきた。一九九〇年のドラフト一巡で指名されたランニング・バックでチームに加わったE・Sのチーム・ワークが絶好調となり、一勝十五敗の最下位チームから三年でスーパー・ボール・チャンピオンに駆け上がった。勝てば官軍。ダラス・カウボーイズは再びアメリカのスーパー・チームとなり、もう凡人が手を出しても握手もできないほどのスーパー・スターになっていた。